

つたら亦た逢ふ然んなら榮次、和太郎、何卒無事で居て呉んねへ」「三、オ、合點だ然んなら御機嫌やう」と三人は

フシ「八幡山で別れを告げて、思ひづくりに落ちて行く

問屋の和太郎は後に日光の鉢石へ逃げて暫らく隠れて居りましたが博奕行状で御用便になり惜しいかな牢死をしてしまいました夫れ故榮五郎が關東一の大親分に成つた事を知りません福田屋榮次は引返へして次田村の己れの宅へ歸つて來ると親父が「何うした旨く往つたか」親父さん旨く遣付て仕まつた「親父、そうか夫奴は好い鹽梅だ」親父「就いちや阿父、我も國越を仕なくつちや成らねへが直歸つて來るから機嫌よく爲て居てくんねへ此處に金が十兩あるから置よ」親父「乃公、小遣ひは要らねへ汝へは旅を爲るんだから持つて行け」親父「マア宜いてへ事よ別に邪魔にや成らねへんだ、取つとさねへちや乃公、往くからの」親父「待て、汝へ一人で國越をしちや不可ねへ」親父「一人で往ちや不可ねへたつて年を老つた和主を連れて往かれるもんか

な」父「何に乃公、ちやねへや汝へに尾いて往きてへと云ふ者があるんだ」親父「へエ、誰れが」父「誰ちやねへ汝へが末妻のお作を連れて往かなくつちや不可ねへよ」親父「申儀云ひなさんな人を殺して國越をする者が嫌アなどを連れて行かれるもんか」阿父は随分悠氣な事を云つてらア「父、夫れだつて置いて往かれちや困るよ乃公が怨まれるからなア」親父「だつて阿父、未だ女房にしたと云ふんちやなし、其内好い亭主を持たせるが宜やナ」と云つたが親父は何んとも答へず

フシ「外へ飛び出し程もなく、連れて歸つた作兵衛が、娘のお作

が手を取つて、サアサア亭主と一緒に往けと云はれて莞爾

お作女は、榮次が傍へヒスリ寄つて、ユレナアモシへ榮次さ

ん、妾しも一緒に何處までも、假令野の末へ山の奥、虎伏す

谷間も厭やせぬ、主と一緒に居すならば、竹の柱らに茅の屋



根 木の葉布團に石枕 食すに居ることも構やせぬ 云はれて

榮次も仕方なく

榮「夫れぢやお作連れて往きもするが艱難辛苦は覺悟だらうな」作「夫りや好いともね豫ての覺悟てさアねー夫れぢア阿父さん往つて來ますよ」何んだか芝居でも見に往くやうな随分呑氣な夫婦でございます之れから二人は諸所を巡ぐつて後に甲州市川へ足を留めまして四年間居る中に八州の角伴佐十郎旦那の最負に成り上州へ歸つて前橋に住居して目明しとなり飛鳥を落す福田屋となり此榮次が歎願に由つて榮

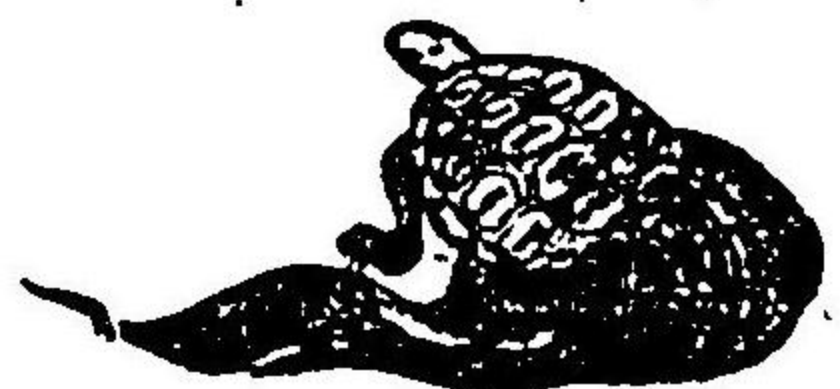
五郎が四十二の時に國へ歸つて永住が出來たのでございます

フシ「偕ても大前田の榮五郎は 八幡山で別れてから 上方筋を

心ろ差し 流れくつて美濃國 神戸の宿で政右衛門 大貸元

の世話になり 名前を變へて勝五郎 然るに文化八年の 十

二月二十日眞夜中に 代官三原幸作を 討つて立ち退榮五郎  
木曾の山路の雪深き 道を逃げ行くお話しは 此後に御機嫌  
伺ひます





逸見貞藏

京山大教口演

フシ「春は三月桃櫻 時を得顔に咲ぬれど 嵐にあふ時は 哀れ

地上の塵ごなる 中に千年の色かへぬ 松や俠客の立姿

下總國古河は土井大炊頭様の領地で、表高は八萬石、此の古河の在に逸見村と云く小村が御座います、此處に三田彌四郎と云ふ名主が御座います、其二男に金次郎、後に貞藏、逸見村の生れ故是を逸見の貞藏と云ふ、只今以て壯健で暮して居ります此の逸見村より僅か距れて釋伽村と云ふ處がある、此處の名主に倉右衛門と云ふのがあります、其悴を倉吉と申しまして、廿三、塚の肴屋と云ふ茶屋旅籠屋に居りました、おせんと申す女に惑つて、借金を繼で女房にした、處が倉右衛門が堅い人で、

名主の嫁に茶屋女は出來ないと、倉吉に僅な田地を分けて新宅を出した、分家のこととて御座います、おせんは名主の悴の御新造になれると思つた處が、夫が新宅を出されたので目的が違ひ、殊には田地畑も澤山つけて呉れないのですから、夫婦で稼がなければ其日は送れない、ソコで生れて間もない友次と云ふ子供を倉吉に預けて出て往つてしまつた、始めて倉吉も目が覺て、親の許へ訖事をしたが、倉右衛門が肯ない

フシ「時しも天保十一年八月十四日の夜の四ツ頃 月は隈なくす

み渡り 百里の外も見へすくばかり 悴友次を寢かしつゝ

月を眺めて倉吉が 忘れもせぬ去年の今日 彼の堺の肴屋で

おせんを酌に見た月も 今宵の月も變らねど 變りはてたは

今の境界 思はず落す一ト雫 小兒の寝顔にかゝりしか ワ



ツと泣出すを

倉「泣なく、汝位いの哀あはれな者はねエ、名主なぬしの初孫はつひらと生れながら、俺おれが馬鹿ばかだばツかりに、祖父おぢいさまに會あはせることも出來きず、乳ちを呉くれる母ははさまは御出おいでて往いつてしまふ、俺おれが手て一いっつで育てあげなければならねエ、處ところが此こゝの通り貧乏ひんぱんだから、乳ちの粉こなを碌碌に吞のせることも出來きず、氣きの作用せいようか日ひましに瘦やせが見みゆる様ようだ、世よが世よであつたら乳母ちちをつけて、大事だいじに育てあげられる汝おれだが、親おやの因果いんぐわが子こに報むかひ、ア一いっ氣きの毒どくなことだ、是これも皆みなな俺おれが悪いんだ、勘辨かんべんして呉くれよ」と

フシ「東西とうせい知らぬ嬰兒あやこを抱いだき上げながら 倉吉くらきちが云いふ言葉ことばさへし

めり勝かち 折おしも垣かきの向むかふを通とほりしは 鳴海なるみの浴衣ゆかたに紺こん猷けん上の

博多帶はたおび 銀造ぎんぞうへの長脇差ながわきざしを打込うちこんで 何處どこで吞のたか微醉ほろ酔機嫌きげん

一いっばい月つきをあびながら 小唄こたがを唄うたふて往いくを眺ながめた倉吉くらきちが

倉「若わかし、其處そこへ往いくは塚崎つかさきの親分おやぶん様さまでは御座ごいませんか」  
「オー誰だれかと思おもつたら倉吉くらきちさんか、流石さすがにお前まへも名主なぬしの忤せがれだ、今夜こんやの月つきに發句はっくでも作こして居ゐなされるか」  
倉「ソナ風流ふうりゆうな身みの上うへでは御座ごいません、親分おやぶんさまにお目めにかゝつたが幸さいはひ、少々せうせうお願ねがひ申まをしたいことが御座ごいます、何なにうぞ此方こちらへお這入はいりなさいまし」  
倉「此この丈助ちやうすけに願ねがひたいとは何なにんだい」  
倉「何なにうぞ是これへお掛け下くださいまし、」  
倉「御免ごめんよ」  
椽えんに腰打こしうちかけた此こゝの塚崎つかさきの丈助ちやうすけと云いふ者が、銀ぎんの俵はたけらばりの煙管たばこで煙草たばこを喫のみながら、  
倉「何なにんだい倉さん、倉くら他のことでも御座ごいませんが、承うけたまはりますとおせんが當時たうじ貴下きげの處ところに參まゐつて豪まく御厄介ごやくけいになつて居ゐるさうで御座ごいます、」  
倉「然さうヨ、俺おれの處ところへ來きて居ゐるヨ、倉くら親分おやぶんさま、夫それれに就ついてお願ねがひで御座ごいます、此この通り小兒こゝろを残のこして出でて往いれましたので、誠まことに私わたしが困こまります、親父おやは昔堅氣むかしがた頑固がんこな氣性きせうとて、詫事わづらをしても肯う入れません、  
倉「成程なるほど、倉くら處ところで江戸えどへ往いつて一いっと稼かせぎして、幾何いくばか金かねを持もつて歸かへり、田地でんちの少すこしも買かひまして、此この通り辛抱人しんぱうじんになつたと云いふ處ところを親父おやに見みせまして、家いえ



へ這入りたいと思ひますが、夫に就て足手纏ひは此の友次」と云つて他人の乳を吞せて大きくしたく御座いません、親分の處へおせんが參つて居るが幸ひ、何うぞ此の友次を少しの間預つて貰ひたいもので、里扶持は江戸から私が屹度送ります、他人の手に育てられるより、産の親の乳を吞たら、嘸ぞ此友次も喜ぶだらうと思ひますで、何うぞ親分御開届下さいまし、〇「ぢやア何かおせんが俺の處に居るから、此の小兒を預つて呉れと云ふのか、倉然うて御座ひます、〇「オイ、倉さん、お前心得違ひを爲なざるナ、おせんが俺の處に居ればと云つて、妾てかけぢやアねエ、お前と喧嘩をして暇を取て來たから、何うか親分少しの間置して下さいと泣つかれたお前も知つての通り彼のおせんが堺に居た時分には、折々遊びに往つて彼奴の酌で飲だともある、其縁があるから世話は出來ねエと初から斷る譯にも行ず、飯焚代りに使つて居るんだ、處へお前の小兒を預けられては、俺の方の用の暇がかける、折角だが斷るヨ、倉親分さま、何にも秘すには及ばねエ、貴下とおせんと情事のあ

つたことは疾から私に知つて居ります、彼のおせんを此處へ連れて來る時に塚崎の親分に何んとか話をつけなければ宜あるめエと相談しましたら、何アに妾が出世するのだ、親分は何んとも云はつしやらねエと斯うおせんが申しましたから、貴下の處へ渡りもつけず、家へ連れて參りました、何も親分女に未練があつて云ふのでは御座いません、此の友次に産の母の乳イ飲してやりてエと思へばこそ願ひ申すで御座います、何うぞ此の事は承知して貰ひたいもので、親分何うぞ御座ひませう  
〇「折角だが斷るヨ、友次を預つたらお前の方は都合は宜らうが、俺の方の都合が悪い、第一倉さん、能く考へなければ行ねエ、自分の造れエた駭兒が自分で始末は出來さうなもんだ、お前は江戸へ稼ぎに往くに、此の駭兒があつて足手纏ひと云ふ處から、俺に預けて面倒を見て貰ふつもりだらうが、お前にやや義理もなければ縁故もねエ、夫故駭兒を預ることは出來ねエ、倉ハイ「氣の毒だが斷るヨ」倉其處を一ツ御承知を願えてエもので、何にしる乳が無エで日増に友次が瘦衰へて參りま



す、此儘捨て置けば永くは保つまいと思ひます、折角此の世に出て来た友次を見殺しにするのも可哀想で御座ひます、一人人助けの思召して、何うぞおせんの乳を飲せて下さいまし、〇「何んと云つても俺は駭兒は嫌エだから断るヨ」倉「ソコを親分さん、〇「クドイヤ」立上つて往うとする 倉「若し親分」と袂を押へるを 〇「何を爲やアがるとボンと拂つた、ヨロ／＼とよろめき、動と尻へに倒れると、抱かれて居た友次がワツと泣出す、倉「泣ナ」 〇「態を見る、馬鹿奴郎」と悪口を吐て垣の外へ出た途端

フシ「後ろにあつたる榛木林の中より立出る一人 月に晃く銀造

への長脇差

〇「ヤイ丈助待て、丈誰だ己のことを丈助と呼捨にするのは、コレ俺を丈助と呼すてにする者は、高砂屋の親分より他にねエぞ 〇「マア待て丈助、俺だ、冠れる手拭をバツと刎る、月影にすかし見ると、年齢二十四五、色のクツキリと白い美しい男、

丈「誰かと思つたら汝や貞藏か 貞「逸見の貞藏だ、丈「何んで俺を止た、貞「マア静にして俺の云ふことを聞て呉れ、其處で話も出来ねエ、此方へ這入つて呉んナ 倉「逸見の親分で御座ひますか 貞「倉吉さんか、久しく會なかつたナ、其子かエおせんとお前さんの間に出来たのは、ア「良い子だ 丈「ヤイト、貞藏、話があるなら早く云へ、〇「マア此處へ腰を掛けねエ、オ「甚ひ蚊だ、倉吉さんモ「少しゑぶしたら宜ひだらう……時に丈助、今己が聞くとおせんに二人の話を聞て居たが、倉吉さんがアレ程までに頼むのだ、何うか此の小兒を引取ておせんの乳で育てやツて呉れ、丈「己は駭兒が嫌ひだから断はるヨ、〇「己が頼むのだから聞て呉れ、丈「誰が頼んでも厭なもの断はるヨ、〇「夫れぢやア是程己が頼んでもお主は承知が出来ねエと云ふのか 丈「出来ねエが断はるんだイ 〇「オイ丈助、お主と己とは兄弟分だナ、丈「然うヨ、忘れもしねエ三年前、仁連の油屋の二階座敷で、お互ひに血を啜り生るゝ時は違つて居るが、死ぬ時には一緒に死のうと約束した仲ぢやアねエか、其兄弟分の貞藏が



頼むのだ、何うぞ此の小兒を引取て一人前にしてやつて呉れ 丈「断るヨ、真何うしても肯入ねエか 丈「断はらうヨ、真夫れなら頼むめエが…… 丈助、其かわり兄弟分の縁は切たから然う思へ、丈「結構だ、己は汝の様な白無垢から出た長脇差は嫌エだ イ「真「マア待て丈助、兄弟分の縁を切やア赤の他人だ、他人となつた上は汝の様な非道な奴は、古河八萬石の御領地は勿論、此の貞藏の眼玉の光る處へ汝の身體は置ておかねエから然う思へ 丈「大層なことを云ふなイ、何時何時でも喧嘩は持て來イ、待て居、ぞ

フシ「小唄を唄つて丈助が 出で往く姿を見送る貞藏」

倉「親分さん、私故にそんなことになりました、真何うも仕方がねエ、何にしる相手がア云ふ無法者だから始末が悪ひ、何にしる其子を抱て家へ來なせエ、隣りの荒物屋の内儀が小兒を亡して、乳がはつて困ると云ふから、夫れへ頼んでドツチリ乳を飲してやんなせエ、倉「御親切に有難ふ御座ひます、真「ヤレ〜可哀想にナ坊や

親父が了見が違うと、何んにも知らねエお前にまで苦勞をさせる、サア〜一緒に往きな、倉吉さん家は此儘で宜ひだらう 倉「ハイ、別に盜られる物も御座ひませんから、戸を引立てゆけば宜しう御座ひます 真「夫れぢやア直ぐ一緒に往きなエ、戸を引寄せ蚊遣りを消した、倉吉が貞藏と共に逸見村を指して參ります、お話分れて此處は逸見の貞藏の留守宅、一子分の越後關川の常五郎、身體一面入墨があるので、人呼でほり常と云ふ、貞藏の代貸元に直り立派な兄イ株で御座ひます、七八人の三下と共に親分の歸りを待て居た、○兄さ、未だ親分は歸らねエかナ ○然うヨ、モ一歸りさうなもんだナ」○殊によつたら古河で遊んで居るんぢやアあるめエか 常「馬鹿を云へ、親分に限つて一人で遊ぶ様なソナ客な人ぢやアねエ」○夫れでも餘り歸りが遅ひぢやアねエか、馬鹿に睡くなつて來た、夫れに酒を飲だ跡で團子の砂糖煮を喰たもんだから、胸が悪くツて仕方がねエ、親分の歸らねエに寢ては悪からうナ、常「マア宜いや、何んとか云つて置から寢てしまへ、○夫れぢやア兄さ濟ね



エが先へ御免を蒙るせ、と若イ者は蚊帳にもぐり込む、跡に常五郎只一人、月を肴に手酌で飲で居る

フシ次第に夜は更け渡り 庭に繁れる秋草に啣く虫の音物

さびしく 折しも撞出す遠寺の鐘 數ふればハヤ子の刻

○御免なさいまし、御免なさい、ドンドンドンドン 誰だ」○倉吉で御座ひます、一寸くら開けて貰ひてエもんで、倉さんか、締りはないヨ、開けて這入んなさい、ガラ〜、倉御免なさい、常何んだ倉さん、小兒を抱へて、息を切て何うしたんだ

倉大變なことが始かりました、親分さんと今久能の一の壺まで来ますと、鏡影から七八人刀を抜て切てかゝりました、驚ひて私は此處へ飛んで来ましたが、直に何

うか御出なすつて下せエ、常何に親分に……サア皆な起ろ、親分が一の壺で取巻れたと云ふから直に往け、向ふには脇差が七八本あると云ふから油断するナ 世合點

だ、と倉吉を留守に置て常五郎が先立で、桑畑を抜け駈け来る久能の一の壺、常一兄

きく、向ふから来るのは親分ぢやアねエか 常親分らしひぜ、オヤ跛を曳て居る

が、足を怪我をしたと見へる ○夫れにしても切り付けた奴等は何うしたらう

常「親分に様子を聞て見ろイ」近寄る儘に見ると、果して貞藏で御座いました」常「親分、今倉吉さんから聞きましたか、一の壺で取巻れたと云ふので、若エ者を連れて

参りましたが、無事でお目出度御座います 真イヤ大きに御苦勞だ 常「相手は何處の奴で御座ひます 真塚崎の身内だ 常「へー塚崎の、兄弟分の間柄で何うしてそ

んなことを、真實は斯う云ふ譯での 常「成程、倉吉さんのことから、へー然うで御座ひますか 真と云ふ譯で、大方身内を連れて待て居たのだらう、二三人峰打を

くわしたら驚ひて逃出した、三下野奴を切た處で仕方がねエから、歸つて来たが嘘

ぞ倉吉さんは驚ひたらう 常「然うですカイ、足を何うしましたエ 真峰打をくわせ

る時に力が這入たと見へて、下駄の前壺を切てしまった、捨てしまはうかと思つた

が、是でも鼻緒を立て置けば、若ひ者が湯上りの穿物になるだらうと思つて、前壺



を立ながら来た、「へー」と云つたが心の内で、年が若ひが大層な親分だ、七八本の脇差の下へ身體を入れて吃驚ともせず、穿物の前壺を立て若イ者の便利を圖る、此の人なら命を捨てても惜くないと思ひました、一同打連れて歸つて来る逸見村、倉吉も貞藏の無事を見て大層喜びました、此方は塚崎の丈助、若イ者の手を以て貞藏を殺さうと謀つた事は爲損じ、此儘には濟されない、ソコデ翌日貞藏の許へ喧嘩状をつけました、今日夕七ツに久能の一の壺へ出張れ、命の取遣りをすると云ふ無法な書面、是を貞藏に送つた跡、「おせんや、お前聞く通りな始末だ、せ」とんだ事になつたねエ、親分、「何うも仕方がねエ、處で貞藏を睡らしてしまへば、逆も此處には居られねエ、二三年長エ草鞋を穿なければならねエ、然うなると先立のは金だ、汝御苦勞だが高砂屋の親分の處へ往つて此譯を話して金を借て来てくんねエ、何アに俺一人の路費にするんぢやアねエ、若エ者にも分けてやらにやアならねエ、此處に五十兩あるが是では間に合まいか、「五十兩ぢやア仕様がねエ、五十人の若エ

者に分けた處で一兩宛しか當らねエ、「夫れちやア親分の處へ往つて来るよ、直に歸つて来るから」と支度致したおせん、高砂村の高砂屋安藏と云ふ目明しで博奕打の塚崎の親分の許へ参りました、此行程一里半、「塚崎の姉さんお出なさいまし、「親分は居るかな、「今朝御用で結城まで出懸ました、「夫れちやア姉さんは居るかエ、「今しがた妹さんにお産があつたと云ふので出懸まして、是も留守ですよ、「何んと云ふ間が悪ひことだろう、「何か御用が御座ひますなら承はりませう、「お前達に話したつて仕方がない、ぢやア妻は歸るがな、若し親分でも姉さんでも歸つて來たら直に知らしてお呉れ、「承知しました、「頼んだヨ、「お氣の毒さまで御座います、親分へ宜しく  
フシ「おせんは高砂村を跡にして 古河御城下へござしかゝる  
急場に入用なる此の金を何うしたのかと思案に呉れ 通り  
かゝつた城下本町



○「若し〜姉さんちやア御座ひませんか、セ」オヤ、お前長太郎ちやアないか、長姉さん何處へお出なさるんで、セ」高砂屋の親分の處へ来たんだが、お前は此處に居るのがエ、長」エー當時居酒屋を始めました、幸ひと繁昌しまして幾何か小金も出来まして、マア姉さんに心配させずに何うか斯うか渡つてゆかれます、セ」夫はマア宜つたよ、おはつに何處かへ往つたのかエ、長」實家へ用があつて出懸ました、セ」然うか子供は大きくなつたらうな、長」三ツになりました、夫は然うとお前さんの子供も大きくなりましたらうな、セ」大きくなつたか小さくなつたか、其後些とも見ないから判らないヨ、長」ヘエー、ちやア姉さんは倉吉さんの處に居ないんですか、今年の春出てしまつて、今ちやア塚崎の親分の處に居るんだヨ、長」ヘエー、恐しひ早う御座ひますな、名主の若旦那の内儀が、親分の姉御になるとは變り方が甚ひ、處で姉さん、何んで高砂屋の親分の處へ往つたんです、セ」斯う云ふ譯でお金が要るから倍に往つたのサ、長」エツ、塚崎の親分と逸見の親分が今日の七ツを合圖に、久能の

一の壺で、夫は大變なことになるましたナ、宜う御座ひます、私が金を貸ませう、セ」夫は長太郎嬉しひが、幾金貸て呉れる、長」澤山も御座ひませんが、五十兩ばかりあります、セ」夫れちやア夫を貸ておくれナ、長」宜ふ御座ひます、御本陣の旦那に預けてありますから、取て来る間此處に待て居て下さい」アワテ、出て往つた長太郎おせんは煙草を呑みながら、今に歸るかど待て居る、表から入つて來は長太郎の女房のおはつ、お光と云ふ三ツになる女の兒を背負て、長」オヤ姉さん、能くお出なすつた、セ」おはつかエ、御無沙汰をしました、オー〜大層大きくなつたネ、お光は長」姉さん、何んでお出なすつたの、セ」實はお金の無心に來たが、長太郎が五十兩貸て呉れると云ふので、待て居るのサ、長」オヤ〜良人は何うかしたヨ、五十兩はさて置いて一兩のお金もありやアしません、セ」夫れでも御本陣の旦那にお金を預けてあるから取て來ると云つたが、長」夫は皆な嘘ですヨ、姉さんから其後便りが無いので、アンナ不人情な人はないと悪く云つて居ましたが、夫があるからお金を貸すな



んで、嘘をついたので御座ひませう

フシ「驚くおせん 儲は弟にはかられたか コリヤ斯うしては居られぬぞ 急いで歸る塚崎村」

丈「おせんか、何うした」親分、高砂屋へ行くぞ、夫婦とも留守で 丈「留守なら何故早く歸つて来ねエ、刻限が延たら卑怯な奴と笑はれなければならねエ、せ」アノ

ネ、長太郎が古河で居酒屋をして居る、其處でお金の算段をしやうと思つて……  
丈「ヤイ、長太郎の處へ寄つて来た、とんでもねエ處へ往つたものだ、アノ長太郎は當時目明しの下を働いて居る、其處へ往つて金の都合をしやうとは、とんでもねエ奴だ」と三ツ四ツおせんを打据る、是で長太郎に欺されたことが始めて判つた、丈「サア猶豫は出来ねエ、夫れ往けと五十人の身内を連れて

フシ「久能の一の壺を指して押出したたり」

此方は逸見の貞藏、身内をすくつた四十三人、イザ繰出さうと云ふ時に、釋伽村の

倉吉が 倉「親分さん、何うか私も若イ衆の仲へ入れて連れて往つて下さい、且夫は叶ねエ、俺がお前を連れて往つたら、貞藏は堅氣を此の喧嘩に連れて云はれては死んでまでの恥だ、折角だが断らう 倉「然う云はねエで連れて行つて頂きてエもので 且夫れちやア倉さん、斯うしやう、其友次と云ふ子を連れて往う、生れて間もねエ子供なら、豈夫に腕貸に頼んで来たとは他人も云ふめエ、又喧嘩は喧嘩、情けは情け、モー一遍塚崎の丈助に此の子を引取て呉れるかと談判て見やう、サア此方へ出しな、子供を懐中に入れた貞藏、且支度が宜ければ出懸けやうぜ 倉「宜しう御座ひます、其時關川の常五郎」

フシ「傍らの皿にありし利根川の名産鯉の生作り」

脇差の鞘を拂つて、スバット鯉の頭を切り、常「親分、塚崎の奴郎を斯う云ふ様にし

て見せませう」莞爾笑つた貞藏、且「常幸先が宜ひナ  
フシ「夫れ往け」 身内を率て貞藏が 友次を懐中に抱きつ、



久能の一の壺へ馳せつける。是から塚崎との談判 續て喧嘩  
が何うなりますか 此後に詳しく辯じませう



飯岡助五郎

京山大教口演

フシ葛城や 流石に夫れと岩はしの 架けし謎さへ解かたき  
思ひ積りし胸の雪 神の恵みか日の恩か 何時しか解てお互  
に 千代や八千代と壽て 神の御前の太々の 嚙子の音に鬼  
熊が 角を折つたる助五郎が 开も賣出しの一席談  
エ、今晚伺ひまするお話は天保水滸傳の中飯岡の助五郎の傳記でございます此助  
五郎と云ふ人は素と下總の三浦の渡り船頭で三浦の助と云つて荒々しい事を好みま  
して何んにも知らねへ世に云ふ無教育と云ふ人物であります夫れは最もで當今と違



つて舊幕時代は學校と申物の設けがありませんから子供を教へると云ふ事に至つては中以下では出來得難い事でありましたから三浦の助が教育の無いのは當然まへの事であります然れども人の頭らに成る者は何か人と違がつて傑出した處ろがあります此助五郎は大膽で腕力がありまして夫れで氣ツ風の好い男子でありましたからトノノ拍子に進んで忽ちまら良親分に成りましたが只だ一ツの疵と云ふのは十手取繩を預かつて八州見廻役の御用を利たのが誤まりで併し之れは無職渡世の仲間の者が云ふ理屈で通常の目から見や當然へだと思ひます世の中と云ふ者は妙な者で釋迦が出れば提婆がある信玄が出れば謙信があると云つたやうなもんで助五郎が出るも繁藏が現はれました此繁藏も助五郎も親分は銚子の觀音の五郎藏の子分でございます先づ下總で銚子の觀音の五郎藏と云つては大層名を擧げた人であります子分も百を以て數へる位いです其子分で建具屋の親方で八木の新吾と云ふ者が飯岡の町へ來て盆を敷きました

フシ頃しも夏の事なるが 三浦の助はブラリと來て 衣單  
を羽織て三尺締す 盆へ向つて 賭勝負 助は忽ち失敗し  
仕切の錢まで取られては 宅へ歸つて何うせうと 暫時思案  
に暮たるが

茫然として見て居りますと自分の氣に入つた目が出て來ましたで助は堪らねへで代貸元の八木新に 助「貸元明日届けるが十兩ばかり廻してお呉んねへ」新「オ、客人串戲云つちや不可ねへ一兩や二兩なら廻しても遣ろうが端な錢を持つて來て打つて十兩廻せなんて大きな事を云ふねへ」助「オイ貸元縦合十兩が二十兩でも明日持つて來て返へすからと云ふんだ其方も代貸元して居たら何の位打つたと云ふのが分らねへ事アあるめへ問屋の土臺錢まで打つて仕舞て仕切錢に手を附なけりア十兩廻してくれとは云はねへ因強な事を云はねへで己れも三浦の助だ恥をかゝせねへでエ、貸



元……新何にを……三浦の助だか何んたへ観音の身内の八木の新吾が代貸元を仕て居  
 るんだ何にを無駄言吐きアがるだへ面ら洗つて来い」  
 フシ言はれて助は忽ちに 巫山戯た事を吐かすなご 云ふより  
 早く拳しを上げて 代貸元の八木新を 打たんごすれば大勢  
 の 子分は助を取り捲て 夫れ賭場荒しご八方より 打つて  
 掛られ三浦の助は 隙を覗つて一さんに 駈上りたる石山の  
 石を取ては滅多投げ 流石の大勢も寄り着けず 賭場に在り  
 たる客人も 夫れ喧嘩だご驚ろいて 蜘蛛の子散すが如くに  
 て 皆な八方へ散り失せたり 八木の新吾は眞先に 石山望  
 んで駈け上れば 助は堪らず又た逃げ出だす 夫れ何處まで

も追ひ驅よご 烈しく追はれて助五郎は 今は逃れる路はな  
 し 着物脱ぎ捨て波打ち際 海は少しく荒れ催やう 波さへ  
 高かく打ち寄する 中へ忽ち身を躍らせ ザンブとばかり  
 飛び込めば 何んぞ堪らん高波は 三浦の助を捲込んで 遙  
 るか沖てへ引行くを 見遣りた八木新其他の者は 何かに水  
 游術が達者でも 兎ても命は無い者ご 認めを着て引取りた  
 り

三浦の助五郎は波に引かれて往きましたたが名洗いの鼻と申處ろへ打ち寄せられ岩角  
 に確かと掴まつて這上がり口の中へ指を入れて水を吐きホツと息を吐きましたたが  
 助「オ、危なかつた既んでの事に一つの命ちを玉やにする處であつたマア助かつて  
 有り難たへ此處は名洗の鼻だな随分波に持て來られたな」と獨り言云ひながら濡た



襖袴を外て之れを堅く絞つて面らから身體をスツカリと拭いて又之れを堅く絞つて縋  
ましてスタ／＼出かけました何處へ来るかと思ふと飯岡から小濱三崎豊浦銚子と來  
ましたが夫れも裸體で往昔は呑氣でございます現今では一足も歩行ません跣足でも  
嚴禁のでも三浦の助五郎は裸體跣足で觀音前への五郎藏の宅へ參りまして  
助「ご免なさへ〜」子「へエ」助「御免なさへ」とがら〜と格子明けて助五郎助「今  
日は」子「へエお出なせへ」と見ると素裸體で跣足たなお前へは何んだへ」助「へ私  
ちや三浦の渡船頭で助てへもんでがんすが親分さんにお目に掛りたくつて參へりや  
した何うかお願へ申やす」子「少しお待ちなせへ」と子分は奥へ來まして 子「親分妙  
な奴が來ました」五「何んだ」子「今店へ色の眞黒けいな大きな野郎で素裸體の跣足で  
來まして親分にお目に掛りてへ三浦の船頭で助てへんで」五「そうか彼の界隈の客人  
は能く此處へ來なざるから何んな服装を仕て居なすつても粗末にしちやならねへ丁  
寧に此方へお通し申せ」子「へエ」子「サア此方へお上んなせへ」助「誠に濟ませんが雜

巾をお貸なすつて下さへ砂つ場をやつて來やしたから其んなに汚れちや居ません  
が」と雜巾で足を拭きまして子分の案内で奥へ通りました五郎藏は之れを見て成は  
ご素裸體だ何んば船頭でもと思ひましたが決して人を輕蔑ない五郎藏 五「サア何う  
か此席へ：何にか御用でございますか」助「へエ親分少しお願へが有つて出ましたか  
何うか私ちの首を取つておくんなせへ」五郎藏は聞いて莞爾と笑ひ 五「之りや面白  
い事を頼みに來なすつた私も長い間だ此土地に居て種々な者と交際たが：お前へさ  
んのやうなお頼みは今度が初めてだが併し品に依ては取つて上めへ者でもねへが其  
仔細を一通り聞てからの事に仕ませう」助「へエ夫りや親分此う云ふのです」と

フシ之れから助は一と通り 賭場を荒した其の事を 残らず語  
りて親分へ 何うせ死ぬなら親分の 刀に懸けて死なふと思  
ひ 斯うして此處まで來ましたと 語るを聞いた五郎藏は



船頭ながら見上げた度胸 實に面白き氣性ぞや 後には役に  
 立者よ 博奕打には的當い 斯う云ふ度胸の人ならば 後は  
 確かな一方の 親分株に成れるはご 思へご賭場を荒した者  
 を 其儘置いてさかつきを 遣るご云事たア八木新の 手前へ  
 も有ればご一思案 思ひ着いたる五郎藏は 子分の者に申付  
 け 悴の大勝呼び寄て 云々せよご密かな差圖 心得ました  
 ご大勝は 頓て助五郎裏庭へ 引き連れ來りて其處へ据へ  
 勝「ヤイ汝へは首を斬られに來たのか宜し親交代りに己が切つて遣る」と刀を抜い  
 て背刃打を食はせました：助はビクとも仕ませんで首を伸して斬られる度胸と云ひ  
 其の覺悟は確かなもので大勝も感心しまして偕て三浦の助を大勝が此方へ連れて來  
 て申ますは 助お前へ宜い度胸だ併し賭場を荒した角も有るから八木新の前へも

兼るし先づ新吾の方へ話しを付けるまで己れが盃を遣ろうが不足か「助何う仕まし  
 て若親分で結構でございます何分宜しうお願申ます」と助五郎も大層喜こびまし  
 た之れから八木の新吾へ話しをいたしまして新吾も承知仕ましたから爰で矢張三浦  
 の助で遣つて居ります中に段々盆も見へて參りましたが未だ本當の博奕打の腹と  
 云ふ者が分らねへ今ちや代貸も打てるやうに成りましたも本當の呼吸と云ふものが  
 知れねへから自分が手張て人客を向ふへ廻はして勝負を仕なけりや何うも面白くね  
 へと云ふので遣ります：博奕師博奕打たすと申まして自分が勝負するやうな事ぢや  
 不可ねへ處ろが三浦の助は自分が手を出しちや預かつて居る土臺錢まで打つてしま  
 つて茫然して居ると助を兄い〜と云つて立て居る者ばかりありません此中に爲五  
 郎と云ふ子分が 爲親分助の野郎にも困つた者でございます「五何うした」爲野郎  
 は博奕へ手を出しやアがつて土臺錢まで打つて仕まりました」之れを聞くと温厚の  
 五郎藏でありますが憤りましたと云ふのは博奕師仲間では此土臺錢へ手を付ける即



ち私費いたしますると之れを嚴重に罰します所謂斬り捨てること云ふ極めになつて居て中々正しい物であります。就は特に演者はお断はりして置ることがあります此お話しは賭博師の事を申すのでありますから盆胡座上で勝負の話しもお出ますが決して不良事は伺ひまた只だ博奕師の膽は之れまでの程度に進んで居る彼れは之れまでの義氣を有して居る者であると云ふ事を口演のでございませうからお咎の無いやうにお聞きを願ひます。五郎藏は立腹いたしましたして子分に申付けて忤の大勝を呼びました大勝さんは早速参りまして「勝」何んですか急用と云ふのは「五」ウム勝彼の助の野郎は飛んでもねへ奴だ今此爲から聞いたが土臺錢を私費たそうだ。何處に居ても構わねへから首にして持つて来い」勝「へー飛んでもねへ野郎だ宜うござへす今疊屋に居ると云ふ事ですから早速糺しませう」と直ぐに大勝は飛び出しました

フシ此方は三浦の助五郎は 其んな事とは知らぬが佛 懇意な宅の疊屋で 遊そんで居たる其處ろへ 日頃仲善き長吉が

飛込んで来て助兄いよ 今親分が爲吉より 兄いが不始末聞き取つて 勝親分を呼寄て 何處に居るこも首にして 持つて来いよと云ひ付たれば お前へ斯うしちや居られまい 早やく工風を仕なせへと 聞いて忽まち助五郎は 草鞋を履いて長吉や 忤けないと云ひ捨て、 足に任かせて逃げて行く 先きは上野勢多郡關東名代の大貸元 大前田村の榮五郎を尋ね来たのは大前田

助「御免下さへ」○「へお出なせへ」助「親分さん御在宅でございませうか」○「へ、親分は大前田明神の祭りに参りやして居りませんが何に御用ならば承たまわつて置さやしう」助「イエ又伺ひませう」と云ふて立ち出ました三浦の助は上州名代の大親分榮五郎の賭場の様子を後學の爲め見ようと云ふ目算であります之れを博奕師西行



と申す物事は見るほうが早や解でございませす百分は一見に如かずと申す助五郎は鎮守の社内へ来て見ると高小屋の見世物猿芝居から揉だの種々な物が有ります其の脇の處ろに大前田の小屋が在りまして勘定場大前田英五郎と云ふ札を掛けてあります三浦の助はズツ這入て見ると驚いた二間盆莞莖でない三間盆莞莖と云ふので二間さへ容易に駒の見分を着けにくいと云ふのに三間と來ちや何うして中々容易な譯な物ぢやねへ中盆が餘つ程達者もので無けりや出來ません三浦の助が見て居りましたが自分の思つた目があつた物と見へまして思はず聲を出して其目を呼びますと其邊に居る子分がソレお客人と云つて厚い座蒲團を出まして「サアお客人之れへお着座下さい」と勧められて三浦の助は極りが悪くなつたのは思はず目は呼んだやうなもの、賭だけの金はなしと云つて着座なけりや尙ほ極りが悪りいし助五郎も之にや困つたかエ、儘よと度胸を据へて其座へ着座た「サア宜し」と聲を懸ますと大前田の子分が「子親分客人が宜しと云ひませす駒が見へませんが何うしませ

う」榮「顔が知らねへから金を晒して貰へ」子「ハイ」と言つて「子エ、お客人濟ませんが未だお顔が新らしゆうござへやすから駒をお晒しなすつて下さへ」助五郎之れを聞いて大膽にも莞爾笑つて「助」へ「エー上甲野の三ヶ國は賭博師の交際が大層宜いと云ふから來て見たが僅かの端たの駒を前へ晒して呉れ：然うか晒して遣らうサア宜し」とクルリつと裾を卷つて其處へヌツと足を二本出しました大前田の子分を始め客人までが顔と顔を見合せまして夫れ賭場荒しだと一刀を引付ける者もあり何んどなく殺氣立ちました此時榮五郎は一刀を抜て助五郎が踏み伸した足の股の處ろを覗つて振り冠り目と出なければ打つ切らうと云ふので榮五郎は宜しと聲を掛けました

フシ「此處が三浦の助五郎 賭した其目が出なければ 二本足は 忽まちに 斬り落された其後は 壁となりて乞食か 何うなるものか運まかせと 覺悟定めて榮五郎 此時拂つた其物の



品は確かに我が物よ 天の助けご胸を撫で ホツと一息さ二三

浦の助は 初めて生たる心ろ持ち

此時中益は駒を纏めて助五郎の前へに置きまして「子、お客人駒をお引なすつて下さへ」助「宜うござへす」飛んだお世話になりやした何う之りやお身内にお上げなすつて下さへ親分さんへ宜ろしうお願い申やす」と其前へにある金には手も着けず「助へエお喧しうございしました」と歸つて行後ろ姿たを見送つて居りました榮五郎は榮「何處の身内か知らねへが宜い度胸の若へ者だオイ誰れか一寸尋ねて見ねへ」と子分に云ひ付て跡を追はして尋ねさせますと 助「エ、私ちやお尋ねに預かりまして何んの某がしと申上るやうな者ではございませせん先刻親分さんのお宅をお尋ね申上た處ろ此方にお出と承たまはりお目に掛りに参りましたが一足お先へ参りましてお待ち申て居ります」と助五郎は其れより榮五郎の宅へ参まして待つて居りますと榮五郎は祭りを仕まつて歸つて來まして之れから改めて挨拶を演ました扱て西行

かと聞きますと助五郎は彼土臺錢を私費た趣むきを申まして何うか詫をして頂きたいと申ますを榮五郎は聞いてそるか宜しく俺れも銚子の觀音さまを參詣 旁往つて詫をして遣ろうと受合て呉れましたので助五郎は大いに悦んで扱て大前田に逗留して居りましたが榮五郎は支度して子分を三人供に連れまして助五郎を同道して上州の大前田を出立いたしましたして銚子へ参りました助五郎は銚子の町の手前へ來ますと大地へピタリと座りました榮五郎之れを見た榮五郎は 榮「助何うした腹ても痛へのか」助「いゝへ然うおやございません之れから先きは親分の許しの無中は一と足も這入れませせんお貸元私ちや此處に待つて居りますが何うか宜しうお願い申ますお貸元がお出下ださるのだが詫びは叶うには相違ございませせんが何分にもお願い申ます」榮「ウム感心だ夫れでこそ人間の道だオイ汝へ達も能く助五郎を見習へ夫れぢや俺れ往つて詫び濟むまで此處に居る譯けにもいくまいから彼の茶屋で待つて居るがいゝ」と云つて



フシ大前川の榮五郎は 銚子へ這入て観音前の 五郎藏が宅を  
 訪ぬれば コハ珍客と五郎藏は 大いに悦こび丁寧に 奥へ  
 招して挨拶も 終りた後に助五郎が 心得ちがいを懇懇に  
 辭ばを低く詫ければ 驚ろく銚子の五郎藏は 之れは遙々遠  
 方を 態々お運び下されて お詫下さるお志ろざし 誠に  
 痛み入りますこ 此處で助五郎の詫事も 無事に納まる元の  
 鞘 目出度銚子に酒肴 差しつ押へつ主客の 間だを巡る盃  
 づきの 數も重なり快樂の 聲は銚子の濱による 波の音よ  
 り彌高く 四方に聞へて悦こばし

却説此の三浦の助が名前を揚た始まりはと云ふと銚子へ太々を打ちに往つたのが最

初であります其れは何う云ふ譯かと申ますと人入家業とか大親分だとか云ふ者は是  
 非伊勢へ往つて太神宮へ參詣を仕まして太々を打つた札が家に掛つて居ないと死ん  
 だ後で彼の位ひの親分でありながら伊勢へ太々を打ちに往なかつたと云はれるのは  
 死んでの後の耻になると此う思ひました五郎藏が今度自分の病氣も重うございます  
 るし未だ伊勢へ太々を打ちに往かなかつたものですから俺の目の黒い中に悴の大勝  
 を名代にして誰を供に夫れに後見は誰れに仕たものかと五郎藏は病床で種々考へま  
 したかソコで子分を集めて相談をいたしました 五サテ俺も今度は彌く旅立だと  
 思ふが是れまで俺れが伊勢へ太々を打ちに往かなかつたのは如何にも残念だ夫れ故  
 悴の大勝を參詣に私しの代りに遣らうと思ふんだが誰れか大勝の後見を仕て往つて  
 呉れる者はあるまいか其の相談に今日皆んなを集めたのだ」と大體の話しをしまし  
 たが夫れぢや私ちが大勝さんの後見をして伊勢へ往つて太々を打ちませうと云ふ者  
 がない：何うして皆んなが伊勢へ太々を打ちに往くのを恐れるかと云ふと其の仔細



フシ大前川の榮五郎は 銚子へ這入て観音前の 五郎藏が宅を  
訪ぬれば コハ珍客と五郎藏は 大いに悦こび丁寧 奥へ  
招して挨拶も 終りた後に助五郎が 心得ちがいを慇懃に  
辭ばを低く詫ければ 驚ろく銚子の五郎藏は 之れは遙々遠  
方を 態々お運び下されて お詫下さるお志ろざし 誠に  
痛み入りますと 此處で助五郎の詫事も 無事に納まる元の  
鞘 目出度銚子に酒肴 差しつ押へつ主客の 間だを巡る盃  
づきの 數も重なり快樂の 聲は銚子の濱による 波の音よ  
り彌高く 四方に聞へて悦こばし

却説此の三浦の助が名前を揚た始まりはと云ふと銚子へ太々を打ちに往つたのが最

初であります其れは何う云ふ譯かと申ますと人入家業とか大親分だとか云ふ者は是  
非伊勢へ往つて太神宮へ參詣を仕まして太々を打つた札が家に掛つて居ないと死ん  
だ後で彼の位ひの親分でありながら伊勢へ太々を打ちに往なかつたと云はれるのは  
死んでの後の耻になると此う思ひました五郎藏が今度自分の病氣も重うございます  
るし未だ伊勢へ太々を打ちに往なかつたものですから俺の目の黒い中に悴の大勝  
を名代にして誰を供に夫れに後見は誰れに仕たものかと五郎藏は病床で種々考へま  
したがソコで子分を集めて相談をいたしました 五「サテ俺も今度は彌く旅立だと  
思ふが是れまで俺れが伊勢へ太々を打ちに往なかつたのは如何にも残念だ夫れ故  
悴の大勝を參詣に私しの代りに遣らうと思ふんだが誰れか大勝の後見を仕て往つて  
呉れる者はあるまいか其の相談に今日皆んなを集めたのだ」と大體の話しをしまし  
たが夫れぢや私ちが大勝さんの後見をして伊勢へ往つて太々を打ちませうと云ふ者  
がない…何うして皆んなが伊勢へ太々を打ちに往くのを恐れるかと云ふと其の仔細



があります夫れは五郎藏が未だ若か盛りの時でありましたが伊勢の山田の鬼熊の子分で伊之助と云ふ者が銚子へ来て五郎藏の宅で草鞋を脱ました然ると五郎藏が妾にお市と云ふのがありまして何時しか夫れと通じましたが知らなければ兎も角も分つて見れば打捨ては置れません夫れ故未だ五郎藏が年若の時ではあるし之れが年頃ろであつたなら宜い分別もあつたでありませうが其處が未だお松飾の潜り敷が少くないから堪らない伊之助を首にして之れを油ら紙に包みお市を駕籠に乗て

フシ子分を附けて五郎藏が 伊勢の山田へ送りしに 鬼熊手紙

を讀んで見て 成程伊之助が悪ければ 首になるのも是非がない 去れど銚子の五郎藏は 物の順序を知らない男子 何に故二人を其儘に 縛つて此方へ護送らぬぞ 人の子分を首にして 己れの妾けを送ることは 餘まり勝手ないたしかた

之れでは物が逆さまちや 此方で詫ぶるの理由はない 謂は輕蔑たいたし方 何れ銚子の五郎藏も 伊勢へ太々打ちに来る 其時此方も出迎うて 確ご挨拶するほごに 其お覺悟で來なさいと 返事をされて五郎藏が 何んの小癪な伊勢乞食と云ふて其の儘過ぎたるが 此事知つたる子分等は 今ま太々を打ちに行き 彼の鬼熊への挨拶を 何うした物かと其手術 互に顔をば見合せて 三人寄れば文珠の智慧 普賢も居らず観音も 五百羅漢の頭まかず 寄せては在れど無い智惠の 破れ袋は價值なし 流石の五郎藏も残念の 拳しを握りて物云はず 此時三浦の助五郎が 膝を進めて其れへ出で



助「親分私ちや今まで控へて居りましたが古い皆さんが何んとも云いなさらねへから申上げますが甚はだ出過ぎたと思し召しませうが私ちが若親分の後見ぢやござへやせんお供して参りやせう少し腹の中に考へもございやす若親分を花籠籠で送らせるとまでは行まずめいが耻あかゝせねい積りでございます」五「そうか助：お前へ往つて來れるか夫れで安心した人數は何の位い連れて往く」助「そうですわ私ちや字が書けねいから書者を一人そうさ和田留に跡は荷擔ぎと都合五人で宜いでせう」五「ウム其位いで宜いかへエ」助「幾許大勢で往つたつて用を達者は一人か二人です跡は足手纏ひです五人で澤山でございます」と此處で相談が極まり金は幾許でも爲替にして送から引を取るなど云ので彌々支度をいたしまして立振舞の祝宴の酒盛りいたします此時五郎藏は皆んなに向ひ「五」皆んなの前へたが此度助が伊勢へ往つて膾すにされて歸つて來るか白骨になつて歸へるか其處は分らねへが助が殺られたら俺が助の墓を立派に拵らへて詫びをするつもりだ又た煎豆に花が咲んとも限らねへ

で助が太々を打つて立派に歸へつて來た其時には其の禮として宅を拵いて綱株を一本株遣るつもりだが誰れも苦情はあるめへな俺が助ばかり可愛がるなんと云ふ事を云ふ者は無かるうのう之れは前へ以て斷はつて置くが

フシ「云はれて子分一同は 決して苦情は有りません 何うか然うして下下さいと 誓ひし言葉に五郎藏は 萬事を頼んで大勝の 後見をして助五郎は 銚子を立ち出で江戸へ來て 其頃ろ名高き飯田町の 菊造さんの宅へ泊り 萬事支度を調のへて 江戸を打ち立ち品川で 五挺の駕籠に旗を建て 銚子の五郎が伊勢参ありと 早く知らせる謀計 之れから乗り込む伊勢の國 山田の蛇ちにあらねども 夫れに増したる鬼熊



を取て押へる助五郎が 智勇を兼ねたる働らき話し 之れ  
は此後ち伺ひまする



野狐三次

京山大教口演

フシ別れにし 其日ばかりはめぐり来て いまだかへらぬ父親  
を 尋ねて登ぼる津の國の 浪速の岸に打つ波の 砕けても  
のを思はする 我身一つは秋の夜の 長き旅寝の夢にだも  
逢はで此世を過すとは 親子の縁の薄月夜 影も寫らぬ  
亂菊に 狂ふ心ろや野狐は 親の遺物を繡刺ろ 野狐三次が  
苦心談

今晚御披露いたしますお話しは野狐三次と申侠客の一節でございますが此三回は江



戸は村松町の大工の棟梁東屋磯五郎の子でありまして幼少時から苦勞をいたしました人で、最も人と云者は苦勞を爲なければなりません。狂歌に、「氣を詰て學問したる人よりも浮世の事に苦勞したひと」と申しまして苦勞人でなければ他人の思ひやりと云ふものがありませぬ米の飯と太陽さまは何時でもでる何處へ往つてもあると思つて居ります。處ろが中々太陽は何處へ往つても出ますと申しても南極と北極や出ないそうです。外は何處へ往つても出ますが米の飯ばかりは出ません。此三次は評判の親孝行で阿母が長い間だの病氣を看病いたし木の葉賣つて母親を養なつたと云ふ位いな青年でございます。米澤町の呉服屋で秋田屋作兵衛之れは親父の出入店でありまして磯五郎が不在になりました。母子が零落しました。可憐だと云つて作兵衛は自分の家作へ呼び取りました。中々の慈善家でございます。母親の病氣全快しましてから三次は二組の頭で橋町の三河屋秀五郎さんの處へ往つて消防師となり母親は秋田屋の臺所番頭に参りまして先づ一時母子の身の定まりは着ました。然るに父

親の磯五郎が借金のため江戸を逃亡を爲たつ切り何處に居るのかさつぱり分りません。三次不斷此事ばかり思つて居りましたが或日の事で三次は品川まで用があつて参りました。歸へり路に高輪の泉岳寺の少し手前へまで來ますと路の傍わらに頻りに苦しんで居る乞食があります。三次は都ての事に親切な青年でありますから通りかゝつて之れを見て「三ヤレ〜可憐そうに誰れも構つて遣らねへと見へる見れば乞食でも無いやうだ。身装も菰は着て居なへし」と三次は側ばへ寄り「三オイ〜お前へ何うしたんだ急病か。病氣は何んだ」人「ハイウーンハイ有り難う存じますウ〜ン癪で」三ヤレ〜「夫奴は苦しいだろう待ちねへ苦しんでるやうぢやお前へ持合せの薬りは無へんだらうな」と三次は駆て泉岳寺の大門角の腰掛茶屋へ参りまして「三オイ女中」女「入らつしやいお掛なさいまし」三女中お前ん處に癪に好い薬りはねいかへ有るなら少し分て呉んねへか」女「アあの癪の薬でございますか。さうです。ね別に癪の薬ぢやございませぬが御嶽さんのお百草に水天宮さまのお札に中將湯



に萬金丹に萬金膏に按摩膏…夫れに清心丹に寶丹仁丹ゼム之れは廣告ばかりで少も利ない廣告を飲むのだと云ふ評判で「三」オイ〜女中已等藥の名を聞くんぢやねへが何んでも宜いから夫れを殘らす出して呉んねへ俺は病人を擔いで來るから」と

フシ「三次は最も深切に 彼の病人を肩にかけ 連れて來たのは茶屋の傍 胡座を一枚借受けて 夫れへ寝かした病人へ

「女女中其藥を夫れ湯呑へ温湯を一杯呉んねへ宜し之れ丈の藥りを皆んな飲ましてたら何にか其の中病ひに打かるだろう之れを…」女「貴客他の物は宜しうございませが萬金膏と按摩膏は不可ません」三「成る程…膏藥を吞したつて仕やうがねへ」三次は藥りを持つて來て病人に 三「サア藥りだ呑みねへ水天宮さまのお百草だけ飲みねへ」三「有り難うございませ」と病人は悦こんで手を合せて三次を拜みます三次は 三「マア其處で少し落着かせねへ心配仕なさんな」と云つて自分は店の方へ來て椽臺へ腰を掛け 三「女中種々有り難う」女「何ういたしましたして何んですかお連れさま

で」三「然うぢやねへ今此先へ來ると彼の人が道端に倒れて苦しんでるから夫れ故可憐ぞうだと思つて面倒見てやつたんだ」女「オヤそうでございませるか夫れは御親切にマア」三「女中酒が有なら一本つけて呉んねへか」女「ハイ畏まりました」三次はソツト病人の様子を覗いて見ると落着たかスヤ〜寢て居る鹽梅ですから自分も安心して元の處ろへ來ると女中は「女」お待ちをさま」三「女中何にか肴を」女「左やうでございませす何にもありませんが湯出玉子か鯛でございませすが」三「夫れぢや鯛一枚焼て先へ湯出玉子を持って來て呉んねへ」と

フシ「三次は海を見晴しながら 別に肴は無けれども 其風景が 何によりも 遠く霞める上總山 沖漕船は帆を上げて 追ひ 風に走る内海の 波も靜かに寄せ來たり 岸邊を洗ふ漣波や 心ろゆたかに水鳥の 立てごも跡の濁らぬは 清き流れの徳



川が治める御代の徳ならん

「女親方さんお酌仕ませう」「三女中にお酌を爲して飲やうな柄でもねへに」「女」アンな事仰しやつて妾くしこそお酌を爲して頂くにお恥かしうございます偶にはお多福のお酌も宜しございませうアね」「三」之りやおつうお酌を仰やい舛な」「女」オ、ソレ煎豆腐ですなへ」「三」大層弱かくお出来なすつたね」「女」飛でもない貴客然んなに油揚げに爲ちや増長しますよ」「三」何に未だ生揚げの中は宜いさ」「女」貴客のやうな粹な方の女房に成りましたら夫れこそねへ」「三」へん年中焼豆腐だろ中々其んな者はア白あへだど」「女」オヤ、八は幾らもあるんでせう」「三」何う仕まして奴豆腐で四角張て居りますから出来やせんな」「女」だつて貴客湯豆腐にすりや好うございますわ」「三」ところが不可ねへ根性が冷奴で水臭へから」と三次は女中を對手駄洒落を云つて居る處ろへ病人は癪が收つたものとみへて腰を屈めながら出て参りました」「人」貴殿さまのお蔭で病氣も収まりました有り難う存じます」「三」オヤ癒つたかね夫りや好い鹽

梅だマア此方へお掛なせへ」「人」姉さんお世話さまになりまして有りかとうございませう」「女」ようございませう事ねへサアお掛なせへ」「人」親分さん未だ失禮でございますがお年がお若いやうで」「三」ア、己等二十一だ」「女」へエー實にお若いに似合すお情深い感心なお方ですな」と云つて此人は三次の顔を熟々として居りましたが何にを思ひ出したかハラ／＼と涙だを流しました三次は之れを見てお前へは何處の者だと聞きますと私は越前敦賀の者だと申す」「三」お前へさん此方に知る邊でもあつて來なすつたのかね」「三」へエ知るべがありましたサア早や人間と云ふ者は、否御酒を召し飲つて居らつしやる處ろで此お話し止ませう切角お陽氣に召し飲つて居つしやるのを恐れ入りますから」「三」宜いよお話しなせへ遠慮は要らねへ私ちや聞きやすお話しなせへ」と三次に云はれて此人は

フシ「涙だながらに此人が 語り出したる其筋は 私しは越前敦賀の在で 一村の大工で由之助 若い時より不品行 夫れ故



重なる借財に 産れた土地にも居り難く 妻子を捨て、夜逃  
して 鶏が鳴く 花の東まの繁昌は 金のなる木の植處ろ  
濡手で粟の掴み取り 金と土との量り分け 百萬石も肩接も  
袖で摺りかはす繁華の地を 聞いて乗込み一儲け 借財返へ  
して又元の 人ご成うご思ふ故へ 遙々來たつた江戸表 尋  
ねし人は白波の 夜働さして捕へられ 同居して居たかなし  
さに 私しも共に捕へられ 牢獄の責苦も三歳越し 漸やく  
白日れ出獄ものゝ 知る邊なき身の悲しさは 誰れに頼まん  
人もなし 寄るべなきさの捨小舟 取りつく島も情けなや  
頼む木蔭に雨漏て 住むべき家もあらぬ身は 食さへ如何に

在るべきや 思ひ出だせば六年以前 妻子を残して古郷を  
出たる儘に音づれを 聞くも聞かぬも身から出た 錆は身體  
の疾となり 人に嫌はれ突き出され 八百八町は廣けれご  
軒借す人もあらばこそ 大慈大悲の觀音や 寺の軒端や椽の  
下た 僅かに凌ぐ雨露の 人の恵みに玉の緒を 今日まで繋  
なき留めたるも 明日の命は夕ふへ待つ 炎火ならぬぶゆの  
身をお助け下だされ有り難く 國に残せし悴めは 丁度貴  
方と同じ年齢 無事で居やら居ないやら 妻子に逢うも今更  
に 面目なき身は世の中に 親身は無しご断念めて 行あた  
り ばつたご共に草枕ら 何處の土や縁ありて 我死骸を埋



むやら 心ろ細さの限りやご 語るを聞いて三次郎も 同情  
涙だに暮たるが

「三」夫れぢやお前へさんは大工さんですか實に不幸せ續きでお可憐そうに併し悪い  
後は善いと云ふからマア氣を丈夫にお持なせへ今何處に居なさるね」由「ヘイ芝の新  
網に居ります」三「何うだへ職業が出来るかへ」由「ヘエ職業は爲れば出来すけれど  
も何方も爲せては呉れませんで」三「そうかへ夫れぢや少こし私ちや思ふ事があるん  
だから由之助さん之れから新網へ歸へるんかへ何うするんだね」由「ヘエ之れ歩いて  
お貰いをいたしませんと今夜泊る事が…」三「出来ねへと云ひなさるのか夫りや宜い  
や一朱もあつたら澤山だろう」由「何ういたしまして泊銀は十四文でございます一朱  
なんて」三「そうかへマア宜いや一朱與やう之れで飯でも食ひなせへとしてお前へさ  
んの居る處ろを聞いて置なきやならねへ何んてへ宿屋に居るんだへ」由「ヘエ辰巳屋  
と申すす」三「オイ女中大きに厄介になりました勘定の外に是りやねへ藥を貰つたり

種々お世話に成たりした禮の代りのお茶代だ少なへが」女「アラマア此んなに戴だ  
ちや濟ません何うも有り難う存じます…若其お方」由「ヘエ」女「アノ之りやほんの少  
しですが妾しの志ろざしですヨ」

フシ中は幾許か白紙に 包んで呉れた志ざし 年は幾歳か白齒  
の娘 銀杏返へしの根本も締り ふつくり出した鬢たぼの  
何處やら意氣で愛嬌の 笑壺は實に悪いほど 八山下たや高  
輪の水茶屋女にや惜い者

三次は此處で別れまして頃は九月四日でありましたが此一件で暇を費りまして高輪  
を出したのは日の暮方で三次はぶら／＼歩行て歸るので只今なら電車で一時間昔  
の小半時で淺草の雷門まで來ますけれども歩行て來るのですから江戸はしへ來た  
時は夜の五ツ頃でありました荒布橋を渡つて照降町の中程へ掛つた時右側の軒下か



ら一人駈出した奴があつて突然り三次に打つて掛りましたからアツと驚いて體を替したから踰跟として此奴は前へ出たを三次ドンと弱腰を突たからバツタリ倒れた此時其れ野郎を疊んで仕舞と現れ出た七八人は四方から三次へ打つてかゝるを三次は三「ヤイ汝等何者だ卑怯な奴等だ此三次を闘討でなけりや打てねへのか名乗名乗ねへ處を見ると辨慶の庄吉だなツサア來やがれ然知つた以上は一寸も後とへは引かねへ」と三次は八方へ眼を配つて近か寄る奴を取つては投げ抓で投りら切つて投げる。栗餅では無い。然れども多勢に無勢流石に三次も段々あとへ退つて照降町の木戸際の處ろまで参いました兩側の商人屋では驚いたソラ喧嘩だと云ふトタン人が降つて來てすしやの屋臺店の上へ落ちたから屋臺店は引くり返へると此野郎は腰を打たか其れへ轉がつた舖の醤油漬と玉子の太巻を兩手に掴んで頬張た然かも七本と之れが投られた役徳だつて。同じ投られながらも今一人の奴は辛いめに逢つた此奴は天ぶらやへ投込まれて天ぶらの鍋を冠つて大焼傷をして若衆に滅茶くんに

打られた。其中自身番から町役人と番太郎は六尺棒と灯燈を持つて出て來ましたが此んな騒ぎてありますから近づけません處ろへ差し掛つた一人のお武家が只一人の三次へ加勢をして呉れましたので。○「夫れ逃ろ」と云つて皆な逃げました中に彼のお武家は一人押へて居りましたが町役人が夫れへ参りまして。役「コレハ何れのお方が存じませんがお相方は貴士でございますか」武「否々拙者ぢやないが之れへ通り掛ると突然拙者へ討つて掛つたから對手に成つたのだが喧嘩の當人は他にあるだろ」役「左やうでございますか」と云つてる處ろへ三次が参りまして此お武家を見て三「之れは萩原先生でございますか」武「オー三次か汝いが喧嘩の對手か」三「へエ何に今日私ちや品川まで用達に参りまして途中で少し暇取る事が在つて此處まで歸つて來ると突然に闘打をくらつたんです先生何うも有り難うございました」武「そわか併かし三次腕試しにや丁度好かつたらう」三「へエ大勢ぢや堪りません」武「危なかつたのかアハ、ハ、ハ、三次ニラ此處に押へて置た奴がある之れを調べて見い」



三「へエ」 莪町役人兎も角も自身番へ連れて行け」と

フシ之れから自身番へ引上げて 調べて見れば破落者の 彼の辨慶の庄吉が 子分の内で金坊主と 異名をされた金助が 猫に捕られし鼠みの如く ぶる／＼震へて控へたを 三次は之れを調べれば 親分辨慶の庄吉が 差圖をしたと分りたり

三「ヤイ金坊主汝へ之れから歸つて然う云へ庄の野郎に卑怯な真似をするな尋常に名乗て来い宿と小屋の無へ人間ぢやねへ二組の三次だ：エー此野郎はお許なすつて下ださへ追剥罪で送りになりましたら御町内でも御手数敷がかゝりますし又引合だ何んだかんだで面倒でございやすから何うか左やうお願い申たうございませう」左やうかね本人のお前へさんが而う云ひなさりや左う仕ませう」三「萩原様左様願ひます」莪拙者何うでも構わん汝まの好いやうにしる」三「有り難うございませう：金坊主

汝有りがたへと思へ何うした右の手が自由に成ねへか仕方がねへや命の代りだ名倉へ通へや何うかなるだろう」莪其奴の腕が何うか成つたのか」三「へエ繩解とさ自己駄破駄仕やがるから一寸と行りやした」之れで金坊主は追放されて横飛びに逃げて行きました萩原孝之進は柔道の先生で三次は先生の門人であります

フシ三次は之れより先生を 濱町河岸の道場へ送り 禮をば演

て橘町 二組の頭取り三河屋へ 歸へりて今日の出来事を

話せば頭取秀五郎は 油断を爲るな注意よ 大工の由と云ふ

者は 村松町の親分に 頼で遣れよと秀五郎が 言葉に三次

も悦こんで 其翌日の晝過ぎに 村松町の親分の吉田屋吉五

郎の方へ行き 二村の大工由之助が 哀れな身の上語りしに

早速承知くれたれば 三次は直ぐと新網の 安旅宿屋の辰巳



屋へ尋ねて來たりて由之助 連れて再び吉田屋へ 歸つて  
 之れを頼み置 橋町へ歸へりしが 今日人は人の身明日は又  
 我身の上の世の中や 熟々思へば我父も 江戸を出てより十  
 年を 過すも早き昔し 風の便りの音沙汰も 泣て暮  
 した妻や子は 何して居るかと只一度 手紙も來ぬのは萬一  
 や萬一 世話仕た二村の大工の 如では無いかと父が身を  
 思ひ出しては孝子の三次 案じる胸は轟ろきて 枕に着けご  
 も眠られず 種々湧くる心配に 其の夜も何時しか明の鐘  
 朝疾起て支度して 米澤町の秋田屋に 母を尋ねて來りたり  
 三「お早うございます」番「お早う三次さん大層早いね」三「へエ何に其んなに早かあ

有りません太陽さまは高く上つてまゝア」番「夫りやそうだがね」三「御免なせへ」と  
 三次は上へあがつて女中部屋へ來まして 三「阿母…お早う」母「オ、三次か大へん早  
 いね…今日は仕業に來たのかへ」三「否や而うちやねへ阿母アに少し相談があつて」  
 母「夫れちやモウ少し経たなくつちや不可ねへよ…奥の朝御飯を濟さなけりや…」  
 三「ア一宜いよ待てるから 母「お前未だ朝御膳まへだろろう夫れとも食て來たかへ」  
 三「ウムニヤ未だ…」何んぼ頭の處は早いたつて未だ飯にやならねへや」と三次は  
 奥へ參いりまして主人作兵衛に逢ひ挨拶を仕まして之れより母親の用事の片付のを  
 待つて居りました其中用も仕舞ましたので母親は 母「三次相談と云ふのは何んだ  
 へ」三「何にね他の事ちやねへんだ已等五六日後にの品川まで用が在つて往つた歸り  
 に高輪の泉岳寺前へまで來ると之れく斯くくよ其れで其由之助てへのは村松町  
 の棟梁の處へ頼んでやつたがのエ阿母ア夫いつが妙なんだ其由之助てへ人が已等の  
 親父と同年配でよ聞きや國に已等と同じ年の伴を殘して來たてへんだ…夫れで



己等ア親父さんの事を思ひ出したら堪らなくなつたんだ萬、や今話した大由の如な難儀爲て居やア仕なかうかと思つたら夕べ夜中眠れなかつたやろうちやねへか夫れで今朝早く遣て來たんだ：阿母ア己等ア之れから大工で西行爲ながら日本國中親父を尋ねて歩行と思ふんだ尋ね當りや直ぐにも歸つて來るからお母ア何うだろうか此事を相談に來たんだ」と云はれまして母親のお常は三次の顔を見て眼に持つ涙だ止め難ましてハラ／＼と流し 母「三次お前へが今の話しを聞いて人事とは妾しや思はないよ實に親父さんも自分が放埒であつたとは云ひながら上方へ行て一儲けして取返へしを付けやうと思つて出かけたんだが：夫れつ切り音沙汰なしに成つたのだから生きて居るか死んで仕まつた者か其處どころは分らないが：妾しや磯五郎さんの出た日を命日と思つて朝晩香花を上げ御飯を供へて居るのだがお前へが尋ねに出て呉れると云ふのを聞いて妾しや實に嬉しい嬉しいけれども無の無い長旅でお前への身體が案じられる萬一や水替りでもして旅で病いでも爲たら夫れこそ難儀を爲るだ

ろう」三「阿母ア其んな事を考へちや何にも出來や爲ねへ假令ば兩國橋を渡りながら此橋が落ちたら何う仕やうと心配爲たら渡れや仕ねへや夫う云つた道理なもんで何にも其んなに心配する事ア無へよ阿母ア夫れでお前へさへ承知爲て呉れりや己等尋ねに出るからの」母「妾しや承知するも爲ないもお前へが其うして呉れれば誠に嬉しいが夫れに就て三次やお前が尋ねに出た序でに今一つ尋ねる者があるが是れも一緒にお尋ねな」三「へエー阿母ア夫りや何んだへ今一つの尋ね物てへのは」母「未だお前へには話さないから知るまいがお前への實親をよ」三「何んだつて阿母ア己等に其んなに親やが有るのか親二人ありや澤山だ何人入るもんか」母「ホ、ハ、夫りやお前は知らないから三次實はお前へは妾しが拾つた人だよ」三「エツ：夫れぢや己等捨子かへ」母「ア妾しに小兒が出來ないもんだから磯五郎さんと二人で淺草の觀音さまを一生懸命に信心して居たんだが丁度二十一年跡の事だが」三「然かも九月の十七日 二人は田町の親類へ 馳走に招ばれ



た歸り路 夜は四ツ過に成つたれど 參詣爲やうご観音の  
御堂に來りて一心に 拜で居たる傍らの 神錢箱の其側に捨  
て在つたは男の兒 日頃念ずる御利益で 授け玉ふた小兒ち  
やご 拾ふて二人が手の内の 玉よ簪しの花よごて 晝は乳  
貰い夜るは寢て 乳粉飲ませて丹精の 其甲斐ありて虫氣も  
無く 育て上げたるお前へぞや 後の證據に取り置いた 物を  
見せんご母親が 立て簞笥の引出しを 開けて取り出す小布  
團に 染めたる形の野狐が 長物語は此後に 又も御機嫌伺  
いまする

花川戸助六

京山大教口演

フシ紫の ゆかりの色の花川戸 遠見にそれご傘の中 黒手の  
小袖五ツ紋 腰にさしたる尺八の 音に聞ゆる伊達氣質 助  
六ごいふ男一匹

今回は男達助六の一節を申し上げます、頃しも寛文八年霜月下旬のことでございます  
したが花川戸の助六の宅には總へ五人の乾兒が居りまして今日は夜に至りまし  
ても皆何所かへ遊びに行つたものと見えまして誰も歸つて参りません宅には六十格  
好になる雇婆さんが一人置いてございます 助「婆さんや若へ奴等は誰も歸つて來な  
いか 婆「左様でございます、親分誰方も歸つて参りませんがもう大分遅うございま



すねえ 助、ウ、大方吉原へでも遊びに行つて了つたのだらう、ぢやア戸締をして寝るが宜い」頓て助六は寢床敷へさせまして遂に其夜は寝て了ひましたが、翌朝になりますと起き出でまして、庭を見ると助「オヤ、大變な何うも大雪だな、近頃珍らしいことである」と、何うやら二三寸は積つてございます、婆アは漸う煙草盆に火を入れてそれへ持て参りました 婆「親分今朝は何うも酷い雪でございますねえ助」「ハ、ア大方此の雪で若へ奴等は降込められて、夫れで歸つて来ないのであらう」頓て奥を掃除をさせまして朝飯にしやうと云つて居る所へ歸つて参りましたは、乾兒の中で蝶々の源治、疍癩の藤吉、喋舌の豊藏と云ふ三人の者、葱を二束許り提げまして一人は三升樽を擔いで一人は、饅の大きな奴を三尾ばかり繩で提げて、途中で買つて来たものと見へて 源「親分只今歸りました何うも誠に昨夜は済みませんでした、北廊へ行つて居りましたと思ふと大變な雪で、マア今日あたりは此の雪を肴にしたら飲めるだらうと思つて土産を買つて来ました、何うです親分、饅鍋で

一杯やりませうか 助「當るといけねえ、藤「拵へが宜いから大丈夫で、源治火を起せ、乃公は料理に掛るから、三人の乾兒は臺所でゴテノ、支度をいたしまして奥へ送爐を持つて参りまして、飲みはじめましたが助六も滿更悪くはありませんから、其中へ這入つて飲つて居りましたが、其日は一日飲暮して了ひましたものと見えて夕景になりますと、到頭三升空けて了ひましたが、助「マダ飲みたければ、取つて来い又三升取つて来て又夜に至つて汲み始めました、最う斯うするうちに亥刻でもあらうかと云ふ時分、助「親分又酒がなくなりました、もう二升ばかり買つてお呉んなさいな」横町の伊勢屋は此の雪ぢやアもう寝たらう、第一彼の家は夜更けには商ひをしねへから、飯を食つて寝て了へよ 藤「でもねへ親分、跡に酒がありました是れで廢しに仕やうと云ふ奴は宜いが、最うないから廢さうと云ふのは、可かねえから、一寸往つて買つて来ますから」と出て行つたが、間もなく歸つて来て、藤「親分、往けません、幾ら叩いても明けねへので、仕方がねへから火事だ」と怒成つたが、



夫れでも明けやアがらねえので 助「馬鹿な奴だ、最う宜い加減に寐てしまへ」三人は酒が欲しいなといつて居りますが、此の大雪では仕方がございませぬ

フシ「雪はますます降り積る 夜はししくんご更け渡り 犬の遠

吠え按摩の笛の音 幽かに聞えるお田樂やの 聲もかすれて

哀れ氣の 待つ燗酒は上首尾と 其まゝ家へ迎へたり」

藤「オイお田樂屋一寸來ねへ 爺「ハイハイ何方でございませうか 藤「ア、此所だく…

…お田樂や兎も角も酒はあるかい 爺「濁酒でございませう、藤「濁酒でも何んでも宜い、サア戸を開けてやるからズツト庭へ擔ぎ込みな、庭は廣いや」其所でお田樂やは荷を擔いだまゝ宅へ這入つて参りました 藤「マア兎も角濁酒を四杯注いで呉んな、其れから跡へお田樂を拵へて呉んな 爺「承知いたしましたとございませう」と頓て盆の上に濁酒を四ツ井に注いで戴せて持つて参りました 藤「モン親分何うです、一杯お上りな

さいませんか 助「馬鹿を云へ、今になつて其んなものが飲めるか 藤「ちやア仕方がございませぬ、サア飲れ」と三人は頻りにガブ／＼飲つて居ります、ところが お田樂やはポロ／＼いたした筒袖のやうなものを身に纏ひまして最う年は六十の坂を越したものと見え水鼻をポタ／＼垂しながら荷物の彼の迭爐からバツ／＼と火の出まする所へ手を當てましてガタ／＼慄へながら取暖つて居ります様子を睨と助六は見つて居りましたが 助「オイお田樂や、大層今夜は冷へる晩だ、お前も何うも其所に立つて居ては寒くつて仕方がなからう 爺「いえ何う致しまして… 助「ヤイ野郎早くして遣れ 助「ナニ親分そんなに急なくつても宜いのですナア爺さん暇が要りやア要る丈け商ひが有るてへなもんだ 爺「左様でございませう、何うぞ御悠り召上つて下さいますやう 助「爺さん此所に火鉢があるから是所へ來て腰を掛けて暖りなさい 爺「ハイ有難うございませう 助「お前は何か宅は何所だ 爺「ハイ私は石町一丁目に住居をいたして居ります 助「何に石町だ 爺「ハイ 助「大變な所から來るナ石町邊りから此



邊へ来ないと商ひが出来ないか 爺「ハイ今は石町に居りますか以前は千住の掃部宿に居りました、其時分終始此の界限を商ひをいたして廻りました、其れでマア彼の田樂やが来たら買つてやれと云つて待つて居て下さるお方がございますから、マア時々此方へも廻つて参りまするのでございます 助「ア、さうか併し爺さんお前は幾歳だ 爺「イヤ最う駄目でござります、六十三になります 助「ハ、ア六十三になつて夜此んな商ひをして行かなくつちやならないと云のはお前も餘程苦勞人だね全體子はないのか 爺「子は一人ございますので、其子で苦勞をいたします 助「シテ見るとお前の子は餘程親不孝だな野郎かい 爺「イエ、女でござりますので 助「ム、女でありながらお前を斯うして夜半商ひをして歩かせやうと云ふのも餘ッ程テ腐れ女と見へるな 爺「中々以ちまして決して不孝者ではござりません、至つて私に孝々にして呉れます、餘り孝々過ぎますから其れゆへ寧ろ首でも縊つて死うかと思ひますとは度々でござりますので 助「何うもお前の云ふ事は全然分りアしねへ、

全體孝々な娘を持ちながら死ぬ何んかと云ふのは悪い了簡だ、何う云ふ次第か其の仔細を咄しなさい

フシ「私は此の花川戸で 黒手組の助六だ 次第に依つて話し相手になりもしやう

情けの有る助六の言葉に 爺「ハイ御心切に仰しやつて下さいまして有難うございませが、イヤ最う只今の私の身の上、お話し申すも面目次第もござりませぬ 只今私は石町一丁目の家主佐兵衛の店に住居を致します、新兵衛と申す者でござりますが、丁度指折り數へて見ると今を去ること三十四年前のこととござりました、千住の掃部宿に住居をして居りました時に、女房は大病で殊に永らくの間病はれまして困つて居りましたが、其節十二になる一人の娘がございました、名をおどわと申しまして其れが健氣にも、何うぞお父さん私の身體を吉原へ沈めてお金子にいたしてお母さんの病氣を治して下さいとの頼み、負うた子に致へられ淺瀬を渡る慣ひ、夫れ



ではさうして呉れと頼みままして翌日娘を伴れ吉原へ参りまして三浦屋と云ふ店へ勤奉公に遣りまして、丁度私の身入金が三十兩と云ふのでございまして其の金子を貰つて歸らうとする時、判人の宅で私も大層馳走になりました、微醉機嫌で夕景のことでございしましたが骨ケ原へ遣つて参りますと、向ふから頬蒙をした男が行違ひさまと私に行當りました其の時に三十兩の金子を摺取られました宅へ歸つて氣が注ぎましたが、何分女房の病氣なり如何とも仕やうがございせんから、翌日又右の判人の所へ参りまして段々と其の仔細を云つて何うか娘の年期を今暫らく延ばして少々金子を借りて下さることは出来まいかと頼みますと、判人さんの申しますには、其れは不可かぬ、昨日お前の娘の漸う證文が濟んだ計り、其れを今日になつて年期を延ばせてへなことは到底それは可けない、夫れでも彼の子が直ぐに間に合ふものなら又格別、マア之れから二三年の間親方の宅で手入をして仕込なければならぬ、言つた處が駄目だから斯うしなさい、お前も金子がなくては困るのなら

乃公がお前に五圓貸して遣るから、兎も角も其れを持つて歸つて其れで何うとも始末を付けるが宜いけれども、乃公も有餘つた身上でもなし、利の付く金子であつて少々利も高いが、別に今返せと云ふのではない、お前の娘が一人前間に合ふやうになつてから返して呉れるが宜い、だが人間は老少不定とて、若しお前が死ぬやうなことになるつて乃公は五圓の金子を損する譯には行かぬから、拂ひの出来ない時はお前の娘を乃公が養女に貰受けると斯う云ふ都合の證文を書いて置いて呉れと斯様の次第でございまして、私も苦しい時でございましたから、其の證文を認めまして五兩貸して貰ひ其れで何うやら斯うやらマゴクくして居りますうちに、遂に其後ち婆さんも死にまして、其れから私も四五年前に千住の掃部宿をば轉宅しまして石町でマア只今の所に住んで居るやうなことで、私の娘の年限は昨年漸う満きましたので右の判人の許へ娘を戻して貰はうと談判に参りますと、何時なりとお前の娘だ、如何にも年限も満いたことだから連れて歸るが宜い、併しお前に貸した金子は何うし



て呉れる、丁度當年まで利息を積つて見ると四十三兩となる、其れを拂つて娘を伴  
れて行くが宜い、又其れを拂ふことが出来なければ約束通りお前の娘は私が貰ふ  
と、斯う云ふ談判でございますから、私も實に驚きました、何んで又其んなに金高  
が上りましたのでございませう、五兩貴方にお借り申しました金子でございませうと  
申しますと、オイ、爺さん冗談言ひなさるな、乃公はお前に十五兩貸してある、  
その十五兩の利分を積つて見ると丁度當年までに四十三兩餘になるのだと斯う申し  
ます、私は五兩しか借りませんから不思議に思ひ、證文を見ますと、何の程にか  
十五兩になつて居ります、全く謀書謀判をいたしたものと見えますから段々談判ひ  
ましたが、何うしても承知して呉れません、それが爲に矢張り娘は廊を出ることが  
出来ません、寧ろそのこと味氣なき世に存命ますよりは死んで了つた方が優だと思ひ  
ましたことは度々でございます」  
フシ「聲もうるみて物語る ジツと聞いたる助六が 不便の者よ

と目に涙 如何に人買ひなればとて 懸る親子を苦しむる  
弱きを助ける義侠心 救ふて遣つた其上で 身の安體を計つ  
て呉んご 心にそれと思ひしは又有るまじき男氣の 心縁り  
の花の色

助「それは氣の毒だねへ、併しお前の娘は何んど云ふ名だ 斯それは三浦屋の揚巻  
太夫と申しまして、助「何んだと三浦屋の揚巻、今三浦屋で全盛と云はれた揚  
巻の父さんか 新「ハイ、して貴郎は御承知でございますか 助「ム、知つてる、乃公  
は始終北廓の揉合の話のことに就いて出掛けるから三浦屋も至つて心安い、揚巻に  
も兩三度會つたが其の判人と云ふのは其れは何所のものだ 新「ハイ其れは吉原揚巻  
町に住居を致して、松鶴居門兵衛と云ふ男でございます 助「何だと門兵衛だ、  
其れは可かぬ、爺さん彼の野郎は以前吉原の門番をして居やアがつて、夫れから成



り上つた奴だ、人呼んで彼奴のことを閻魔門兵衛と云ひ、又人の油で己の身を照して居やアがるから小燈門兵衛と綽名を博つて居る奴だ、其んな悪黨に掛つちやア其れは爺さん、お前が幾ら談判をしたつて到底駄目だ、乃公も満更聞いて是れは棄て置く譯にならないから、乃公が一ツ何うかして話を着けて娘をお前の手許へ歸るやうにして遣らう、新、ハイ何うも親分様有難うございます、何分宜しうお願ひ申します、助「マア兎も角も今晚は夜が更けて居るから宅へ歸りなさい……ヤイ野郎早く器物を空けて遣れ」と言ひながら紙入から金子を一兩取出しまして、助「サア爺さん寒い時分だ、之れで何か暖いものでも喰つて歸りなさい」新兵衛は涙を流し厚く禮を述べて立歸りました、翌日は好い天氣となりましたゆゑ、吉原揚屋町の松鶴屋門兵衛方へと参りまして、

フシ「揚屋身受けの相談を 四十三兩金を出し 老爺を助ける其爲に 乃公が身代金出すので有る 否哉を云ふたら不都合ぢ

や 之れは承知をする様ご 聞いて門兵衛打笑みて 男を立てる此方の身受け 如何にも承知いたしたり

門兵衛は四十三兩の金子を請取りまして、門「夫れについて神田紺屋町一丁目に劍術の道場を出して居ります鳥井新左衛門といふ人は揚卷の客人で有りますから、此の先生の所へ一寸お願ひなすつて置きなされるやう、先方は武家の事ですから、又跡で面倒でも起ると往けませんから」助「お馴染の客人とあれば、私が往つて、お話を置いて置かう」と云つて立歸つて参りましたが、翌日に相成りまして助六は紺屋町へ参りました、黒の紋付に袴を穿きまして、絞袴の一刀中は覺への水田國重、以前は武家丈けありまして、自然見識があります、只一人玄關へ突立ちまして、助「お頼み申上げます」と案内を乞ひますと、夕立の傳告と云ふ弟子が其れへ出て参りまして、傳「何者だ、其方は何所のものだ、助「エー私は淺草花川戸に住居をいたします助六と申すものでございますが、當家の先生に少々お目通りを願ひたく其れゆへ罷り出で



ました。傳ハ、ア左様か、ア、暫時待つて居れ」と頓て奥へ申入れまして暫らく經つて此方へ通れよとのことでございます、其處で案内に伴れられてまして十疊許りの座敷へ通りますと、茶煙草盆も出しません、助六は其れへ控へて居りますと、二人の弟子を連れて立出でました烏井新左衛門、二人の門弟は高麗狗のやうにビタリと座り兩手を仕へて門弟「恐れながら大先生に申上げます、淺草花川戸の町奴助六と申すもの、御目通りを願ひます」新「コリや助六とやら、余は烏井新左衛門であるぞ、何用あつて参つた」大變な見識でございますから、心の中には可笑しく思ひましたが、が然有らぬ體にて兩手を仕へ助「是れは大先生にはお初に御目通りを願ひましたが、私は黒手組の助六でございます、今日罷越しましたのは少し先生に願ひの筋あつて参りました、實は當時吉原の三浦屋方に居ります彼の揚卷と云ふもの、二條に就きまして罷り出でましたのでございます、本來揚卷の親と申しますのは、お田樂酒賣を渡世と致して居ります新兵衛と申すものでございます、既に揚卷も永らく

の間三浦屋に親の爲とは言ひながら勤めを致しまして、昨年最早其の勤の年期も満ちましたのでございます、彼女も親許へ歸りたいと心得ますが、何分判をいたしたる揚屋町の門兵衛と申すものに、少々金子の出入がありまして、夫れゆゑ當月まで延引になつて居るのでございます、處が揚卷の親新兵衛も追々取る年でございまして、一日も早く娘を我が手許へ引取りたいと云ふので、實は私遠縁の間柄でございまして、態々頼みに参りましたので夫れゆゑ私は此のことに就いて昨日門兵衛の方へ示談に参りました處ろが何うやら彼は御當家様へ向けて差上げるやうの話し合に至つて居りますから、一應御當家様へお届けを致した上伴れ歸れとのことでございまして、夫れゆゑ今日は先生のお宅へ出ましたやうな次第、右様の譯でございますから、ごうが揚卷なるものを實親新兵衛の方へ御遣はし下し置れますやう態々願ひに罷り出でましたのでございます」云はせも果てず烏井新左衛門大に憤り

フシ「黙れツ助六 不届なことを申す奴ツ 彼の揚卷と申すもの



は最早此方の妻である 豫て身受けの相談に 昨日門兵衛  
罷り越し 百兩出せば差上げるこ 證文引換金子を遣り 駕  
籠以て向いにやつたれば 程なく之れへ連れ來らん 早々歸  
れど罵れば 扱こそ門兵衛吾れを欺むき 鳥井の金子を取つ  
たるかこ 心中怒れど然有らぬ體

助「それでは先生、其のお金はお手許へ返るやう仕ります、年取つた新兵衛を不便  
と思召し何うか御推量下され私方へ親許身請をさせて下さりますやう願ひます」  
新「素より此方が宿の妻に仕やうと決心をした以上は決して誰が何と言つても揚卷  
を遣はすことは罷りならぬ、早々歸れ……コリヤ、門人此奴を門前へ引立て  
ろ」夕立の傳吉、高飛の助八、此の兩人がズツと起ちまして、頓て助六の側へ進み  
寄り、助「コリヤ早々歸れ、歸らぬか」と双方より利腕を取つて引立てやうと致しま

す助六は睨と其の様子を眺めて居りましたが、助「是れは怪しからぬ、お前さん方は  
何にをなさる、何「ゴテ」云ふな、此の場を立て」助「ヤイ汝ア手籠めに致して何を  
する、巫山戯たことをするな」とバツと其の手を拂ひましたから、兩人はヨロ／＼  
と致して、汝れツと再び組付いて來る奴を高飛の助八の襟髪を握んで肩に引摺ひで  
次の間へ投飛ばし、續いて來る夕立の傳吉を正面の方へ投げ付けました、此の有様  
を見た新左衛門、武士に向つて手向ひするか、憎い奴、其處動くなと云様に

フシ「一刀引抜き切込を 空を打たせた其の早業 南無三寶と鳥  
井新左 又取直す利腕を 確と押へし戸澤助六 助骨の邊り  
を一突き當てれば 堪りもあへず倒れたり

助「ヤイ新左、乃公がこれ程までに頼むのに、理合が分らなけりやア仕方がねえ、  
腕づくで揚卷を此方へ巻上げて了ふんだ、返報がしたくば逃げも走りもしねへ、淺  
草花川戸黒手組の助六だ、何時でも出て來いと、大言を拂つて悠々と引取つて了ひ



ました、新左衛門は目を廻して仕舞ひましたから、兩人の門弟が色々介抱いたしました所、漸々氣が付きましたから、尊「コレは何うも先生お氣が付きましたてお目出度うございます、新「シテ助六は何うした、尊「エ、最う歸つて仕舞ひました」と云つて居る所へ、吉原へ迎へに遣りました、花垣の五郎藏、雄鳥の才三と云ふ兩人は這々の體で逃げ歸つて参りました、五「先生、吉原から揚巻を駕籠に乗せまして連れ歸りました所、途中にて助六の乾兒大勢出て来て、とふく連れて行かれました、とても叶はぬから逃げて参りましたと、聞いて新左衛門、此上は仲間の者の手を借りて此仕返しをして呉れん」と早々廻文を廻して市中の道場より一統の組合の者を呼集めました、此の廻章を見て浪人組追々に紺屋町の道場へ集りました、此方は花川戸助六でございまして、此話を聞いて揚巻を我宅に置いては宜くないと思ひ、山の宿の金神長五郎の方へ預けまして、其上相手は鳥井新左衛門何うせ此の返報に来るは必定と、思つて居る所へ浪人組が八十人も押して來るといふから、其んなら此方も男

達町奴の組合の者へ廻章を廻しました、何うしても此の方が人氣が集ります、忽ちの中に近邊の大勢の俠客顔殺が馳集る、一番浪人組を對手に命の取りやりをするとは此奴ア近頃面白い、何でも此方の腕前を見せつけ呉やうと何れも腕によりをかけた居りました、既に双方押寄せる時は如何なる騒動の出来いたさんも圖り難く、市中の人々は戦々兢兢といたして居るやうな始末でございまして、然る所こゝに其頃下谷根岸に住居いたし、浪人組の總取締をいたして居る寺西八十左衛門関心といふ人、元加藤式部少輔殿の家來でありますが大力無双にして劍道の達人年は六十に餘つても中々の豪傑、この方が、右の一條を聞いて新左衛門は自分の門人同様でございますから懇々説得いたし、自身花川戸へ乗込んで助六に面會いたし、穩かに話をつけて双方和解をさせ、無事に納めました、この事がまた評判となつて助六はいよく顔を賣り、男の中の男と立てられるやうになりました、其後に至つてフシ縁をむすぶ揚巻が 本名こわを妻となし 父新兵衛も引取



りて 孝養盡す助六が 心は薫る花川戸 語り傳へて今こゝ  
に 綴りなしたる一卷は 紀念に残る淺草の名も鳥越の意行  
寺に 立つる妹背の比翼塚 朽ちぬほまれの物語り

本日 俠客銘々傳

明治四十五年七月八日印刷  
明治四十五年七月十三日發行

定價金卅五錢

郵税金六錢

浪 花 節  
本日 俠客  
銘 々 傳  
【不許複製】

口 演 者  
發 行 者  
印 刷 者  
印 刷 所

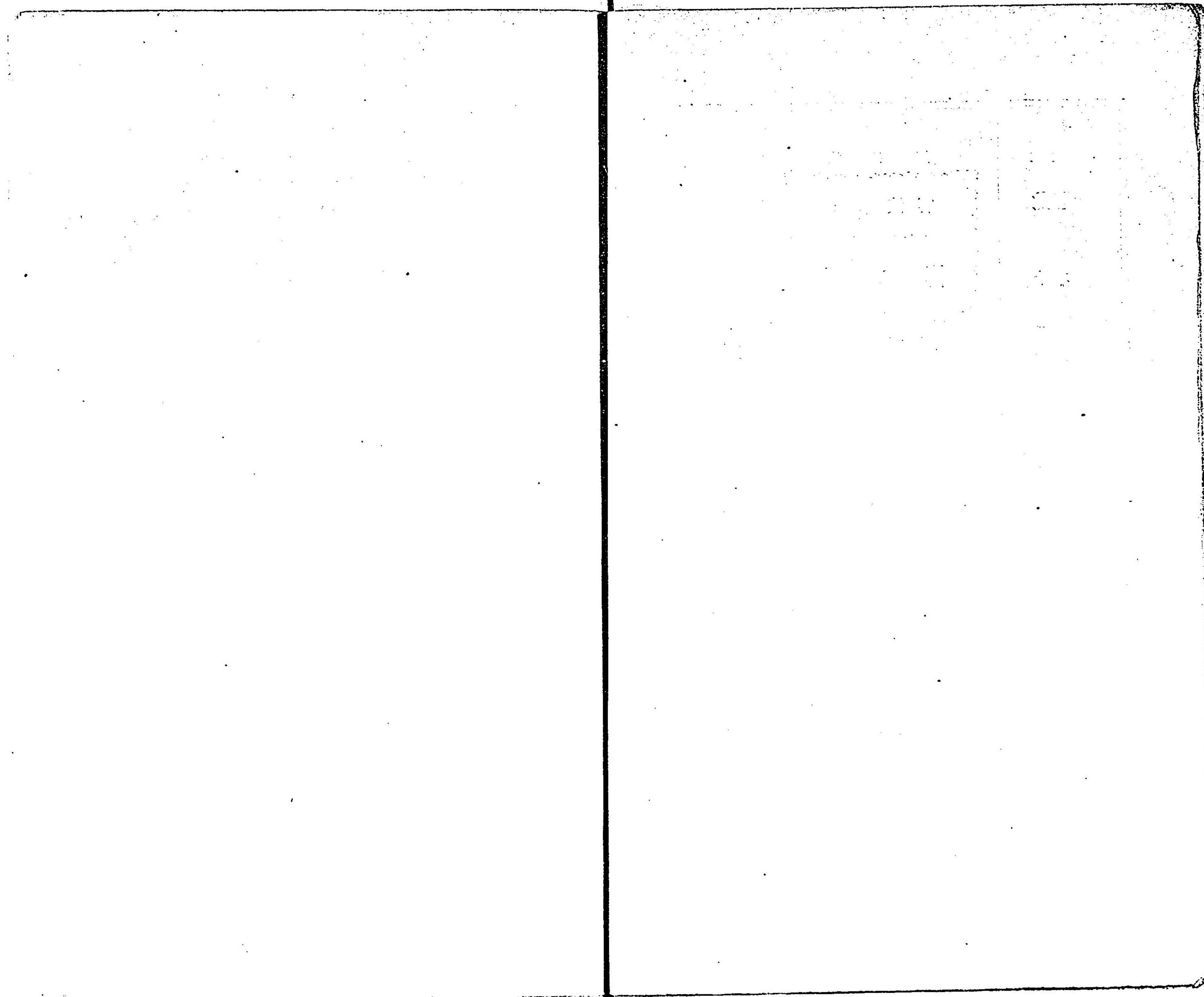
京 山 大 教  
東 京 市 淺 草 區 旅 籠 町 二 丁 目 七 番 地  
中 村 惣 次 郎  
東 京 市 芝 區 愛 宕 下 町 一 丁 目 五 番 地  
牛 坂 三 郎  
東 京 市 芝 區 愛 宕 下 町 二 丁 目 五 番 地  
邦 文 社

發 行 所

東 京 市 淺 草 區 旅 籠 町 二 丁 目 七 番 地  
日 吉 堂 書 店

電 話 下 谷 四 九 三 一 番  
振 替 東 京 一 一 六 一 六 番







239  
439



東京  
日者堂發行